

日本放送協会会長賞  
(石川県人権擁護委員連合会長賞)

## 「ちょっとの勇氣」

津幡町立津幡南中学校 3年

笠 島 彩 (かさしま あや)

私は八月二十一日に誕生した。しかし、私には他の子と違い、顔のほほに大きなあざをもって生まれた。そしてそのあざは消えることなく、私は小学校へ入学した。その時、周りの子たちを見て私は思った。「なんで私は他の子と違うの？ どうして顔に大きなあざがあるの？」このことを母に言うと母は、

「ごめんね。お母さんが悪いんや。こんな風に生んでしまっでごめんね。かわってあげたらいいのにね……。」

と私の頭をなでながら泣いた。そんな母を見て後悔した。だから、このことは言わなければ母も泣かないで済むと思い、自分の心の中に閉じこめようと決めた。それから学年が上がるにつれ、悪口が増えていった。

「でかホクロ!!」

「顔に黒いもんついとるぞ!!」

といろいろな悪口を言われたが、私はずっと耐えた。人が見ていない所で泣き、決して母や家族の前では泣かなかった。私のことを自分のせいだと責めて泣く母を二度と見たくなかつたからだ。しかし、誰にも相談できず、一人で悪口を耐えた私の心は限界だった。どこへ行くにも人の目を気にし始め、写真や鏡を見るのが怖くなった。卒業式の卒業証書授与でも、受け取る時にいろいろな人から見られる横顔があざのある左側だった。だから人の目が恐く、卒業式へ出たくなかつた。

だが、なんとか卒業式をのりこえた私に、新たな試練がまっていた。中学校への入学だった。中学校では、自分のいた小学校の人以外にもいろいろな人が集まってくるからだった。きっとまた初めて私を見た人に、悪口を言われるんだろう。傷ついていた私の心は、マイナスなことしか考えられなかつた。絆創膏ばんそうこうを付けようか？そんな考えも浮んだが、これまでの弱い私を変えたいと思い、いつもの顔、あざのある本当の私で行くことにした。

そして中学校へ入学。でもやはり私の頑張りや人の軽い言動によりもろくも崩された。中学校に入り、新しい悪口がついたからだった。

「ジャンボクロ。」

ところどころからこの声が聞こえた。私が知らない人からも言われた。そしてそれを聞いていた人が、爆笑していた。そんな声は私の心に一撃だった。友達も信じられなくなり、私の心は人を受け入れられなくなった。それから一カ月ぐらいすぎた頃、隣のクラスの友達の家へ行った時、また、

「おー。ジャンボクロやあ。ジャンボクロ。ジャンボクロ。」

そう言うてくる声がかきこえた。だから、いつものように自分一人で必死に耐えた。しかし、すぐにやめてくれなかった。そしてその声をきいているうちに耐えきれなくなり、涙があふれた。

その時。

「やめろや!!」

どこからか聞こえた。それは、会いに行った唯一、信じていた友達だった。私はびっくりして声が出なかった。小学校から悪口を言われ続け、六年間、一度も助けてもらえなかった。悲鳴をあげている私の心に気づいてもらえなかった。そんな私は、その友達のたった一言で、心にためてきたたくさんのことがスーッと取れていくのを感じた。それはまるで、流れていく水を手で受けとってくれる、温かいぬくもりだった。そしてそのあとも、

「ホクロがあってなにが悪いんや!!だれにだってホクロぐらいあるやろ!!私にだってあるし、おまえにもあるんやからそんなこと言えんやろ!!謝れや!!」

と友達は自分のことのように泣きながら、悪口を言った人に怒ってくれた。その時も私は泣いていたけれど、いつものくやし涙ではなく、うれし涙だった。そして、その時、私は気づいた。私は一人ではないということに。私のあざを自分のせいだと責めて泣いた母、悪口を言われた後、「大丈夫？」と声をかけてくれた人たち、そして勇気を出して声を上げてくれた友達。気がつけば、私の周りにはたくさんの支えてくれる人たちがいた。そんなたくさんの人たちがいてくれたからこそ、今の私がいるのだ。そしてこの出来事をきっかけに私は、ちょっと勇気を出すことで人の心を助けることができる気づいた。「ちょっとの勇気」それは何倍にも大きくなり、人の心に届くのだ。だから私も自分が助けてもらったように、いじめられている人、困っている人を助け、笑顔にさせてあげたい。心からそう思う。

みなさんも、ちょっと勇気を出して、いじめられている人、困っている人に声をかけてあげてください。それは、人を笑顔にさせる幸せの魔法だと思います。そして、この魔法がどんどん広がっていき、笑顔があふれる世界になってほしいと願っています。